

【編集後記】

本号は、2017年3月24・25日にパリでおこなわれる第二回日仏中国宗教研究者会議の準備をすすめながらの編集となった。

本号では、三浦國雄先生の「聖地としての墓—『真誥』に対する新視点—」を巻頭にお迎えすることができた。この論文は、張道陵前後の時代における墓所に対する信仰の変化を論じた姜生氏の研究（『漢帝國的遺産：漢鬼考』上篇「煉形之宮」：漢墓の時空、神祇和仙譜）をふまえつつ、『真誥』にみられる墓所の観念をそれに対照させて、後漢から魏晉の墓所に対する思想史により深い反省を迫る。姜生氏によれば、漢代において墓は、戦国期から漢代にかけて盛行した「形解銷化」を承けて、神仙へと跳躍する肉体を煉成する「煉形の宮」の役割を果たしていた。「屍解」という昇仙は、墓室において死者が「煉形」（魂魄の再結合）を果たして神仙として再生することであった。このような尸解信仰は、「張道陵」によって代表される即身成仙（死を経過せずに生身のままで白日昇天）の新しい信仰が勃興することによって衰退していった。本論は、このような姜生氏の説を踏まえながらも、『真誥』にみえる墓所の観念は、このリニアな思想史では説明できないとみて、この問題を考えながら、4世紀から5世紀にかけての上清派の人々の宗教的想像力を探っており、墓という観点から洞天にも論及されている。なお、本論の中国語による改訂稿が、第二回日仏中国宗教研究者会議で発表される予定である。

大形徹氏の「齊雲山真仙洞府探訪記」と「齊雲山真仙洞府十大洞天・三十六所靖廬洞天・海中五嶽洞天・七十二福地—齊雲山石刻にみえる洞天福地—」は、大形氏が2014年11月に安徽省の齊雲山を調査した報告である。齊雲山は、現在、道教の四大名山の一つとされ、洞天福地と呼ばれているが、十大洞天・三十六小洞天・七十二福地の一つではない。当地には独自の洞天思想が伝えられていたらしい。年代不詳の「齊雲山石刻」は、本論で初めて紹介される史料であるが、司馬承禎や杜光庭の洞天思想とはまったく異なる洞天および洞天的順次が示されている。

土屋「唐代洞天巡礼行程初探」は、従来ほとんど看過されてきた、唐代の道教における聖地と巡礼の問題を検討しようとする。当時、どのような聖地と巡礼があったのか、石碑史料を中心に例示している。その結果、巡礼と女性が上清位を得ることが関連している可能性や、巡礼において印が持つ重要性などが示される。なお本論も、中国語による改訂稿が、第二回日仏中国宗教研究者会議で発表される予定である。

酒井規史氏の「第三十六小洞天金華山洞の現況」は、浙江省中部の金華市にある金華山を、2014年夏に酒井氏が独自に調査した報告である。おもに『金華赤松山志』にもとづき、文献記載と現況とを対照させて考察している。現地

には複数の洞窟が存在し、そことは別に宝積観といわれる道観があるという。また、ここは洞天として尊重されただけでなく、葛洪撰『神仙伝』にみえる黄初平が隠棲したところともされ、黄大仙信仰の聖地でもある。黄大仙信仰は香港で有力であるため、香港からの訪問者も多いという。

巡礼の問題と接続可能な土屋のもう一つの論文「司馬承禎の洞天思想と坐忘論」は、司馬承禎の洞天福地体系に個人の修養と国家の安寧の祈願という二側面があったことから、その両側面を代表する史料を検討しながら、司馬承禎の思想と洞天の関係を闡明しようとする。国家の安寧を祈願する側面を代表するものとして百二十巻本『説郛』に収載された『洞天福地名山記』があること、洞天における個人の修養の側面と司馬承禎の坐忘の思想は関連していること、その坐忘論について考察するには、王屋山に立っていた石碑の『坐忘論』によるべきこと、それによれば、司馬承禎の思想では、坐忘・服氣・金丹が重要だったこと、その服氣術は潘師正から伝えられたこと、こうした司馬承禎の説を実現させる自然環境と材料を提供できる場が洞天だったこと、などを述べている。

いくつかの論文は、洞天思想を宗教信仰の場と結びつけながら考察しようとしている。とはいえ、宗教信仰を实践する場に赴く、いわゆる巡礼の問題はまだ今後の研究の進展が待たれる。

ご寄稿くださった三浦國雄先生に感謝を表します。制作には古賀弘幸氏にご協力いただきました。記して謝意を表します。(MT)